2017年7月23日

福音書からのメッセージ

刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。（マタイによる福音書13章30節）

敵である悪魔が蒔いた毒麦のことは、刈り入れの時まで放置しておきなさいと、イエス様は語られます。刈り入れとは終わりの日のことです。福音書が書かれた時代、キリスト者と呼ばれる人たちは、大変な状況の中にいました。もともとは同じユダヤ教だったのに、会堂から追い出され、迫害を受けていく。キリスト教など認められていない、異端とされていた時代です。その中で信仰を大切に守り、伝えようとして、福音書が生まれていきます。

隠れた場所でひっそりと過ごし、周りに目を光らせながら生きていく。いつ襲われるかもしれない。密告者が現れるかもしれない。村の人たちどころか、親、兄弟ですら信じられない。そうした状態の中でいるわけです。彼らの共同体は、いつしか排他的になっていったことでしょう。疑心暗鬼が渦巻く中で、あいつは毒麦だ、抜いてしまえといったことが、当たり前のようにおこなわれていきます。でもそれは本当に、イエス様の求めていることなのでしょうか。

あくまで想像です。マタイ福音書が生まれていく中で、たくさんのイエス様の資料が集まってきたと思います。その中で、この毒麦のたとえに出会った。彼のまわりには、毒麦を探し、どうやったらうまく抜けるのかと、自分たちで何とかしようとする自分たちの姿が目に入ったのかもしれません。そしてイエス様のこの言葉に出会い、思いを新たにしたことでしょう。

神さまは、憐れみ深く、忍耐強いお方なのです。毒麦だからといって、すぐに引っこ抜いて燃やしてしまえという方ではない。それなのに、わたしたちはすぐに、あいつは仲間ではない、彼とは話が出来ないと言って、毒麦を何とかしようとするのです。しかし考えてみて下さい。そもそもわたしたちは本当に良い麦なのでしょうか。毒麦ではないといえるのでしょうか。良い麦として人を裁き、毒麦の罪を問い詰めることができる人など、この世にはいないのです。

わたしたちは完全な麦ではない。でも、麦の部分が少ししかなかったとしても、神さまは忍耐してくださる。どうしても自分の力で良い麦になれなかったとしても、イエス様は罪人のために祈ってくださる。

教会にも、わたしたちの心の中にも、毒麦は入り込みます。でもそれは、わたしたち自身の姿でもあります。だからわたしたちは、すべてを委ねるのです。きれいなところも、汚い部分も含めて、心を清くしてくださいと。

すべての人を天の国に招きたい、そのイエス様の思いを、わたしたちは感じ取り、歩んでいく必要があるのではないでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/